



ダジャレを交え快活な表情で特定外来種のことを語る小野木氏と熱心に聞き入る参加者ら ー 北地区センター（大垣市林町）

『増える外来植物 人間活動がカギ！』 大垣で研究会開催

- 生態系に悪影響を及ぼしたり、人に健康被害をもたらしたりする外来生物への対策に取り組んでいる、木曽三川フォーラム（小野賢悟会長）は11月8日（土）、大垣市内で普及啓発のための研究会を開きました。

冒頭、小野会長は「現在、我が国の植物群落の約6割は外来種と言われている。外来植物の防除は大切なことではあるが、地球全体の二酸化炭素（CO²）削減や環境美化のことを考えれば全面否定も出来ない。植物全般を大切に考えていく必要がある」と挨拶。

講師に招かれた日本自然協会参与の小野木三郎さん（78）は「木曽三川の在来植物と外来植物」と題して講演。この中で小野木さんは「河原の環境は、帰化植物の浸入が入りやすいところである。人間が手を入れなくても自然界は変わっていく。人間が手を入れれば、もっと自然界が変貌してしまう」と警鐘。その上で「特定外来生物を入れない、捨てない、拡げないことが基本原則であるが、現実的に完全防除することは難しい。流域全体を見据え、自然観や価値観、生活スタイルや生きざまなど、その時代の流れの中で対策を考えていくしかない」と説明し、市民らは熱心に聞き入っていました。



揖斐川の河川敷で普通にみられる侵略的外来種ワースト100選定の植物の例（左から、オオキンケイギク、ハルジオン、セイタカアワダチソウ）